立教チームとして、支援活動のバトンをつないでいく

立教チームでつなぐ被災地支援プロ ジェクト(令和６年能登半島地震)

立教チームでつなぐ
被災地支援プロジェクト
令和６年 能登半島地震

[プロジェクトの概要]

ボランティアセンターでは、 2024年1月1日に発生した「令和６年能登半島地震」に対する支援活動として、「立教チームでつなぐ被災地支援プロジェクト（令和６年能登半島地震）」を立ち上げました。 卒業生とのつながりから、 活動拠点を石川県七尾市和倉温泉地域に設定。 2024年度は３回の現地活動（第１弾：7/ 1～3、 第２弾：8/ 16～21、 第３弾：2/17～20）を実施し、 計30名の学生が参加しました。

プロジェクトの MISSION（使命）

「令和６年能登半島地震」における災害被災地の復旧・復興に、立教チームとして貢献すること。

立教チームとして目指すこと＝VISION

和倉に対して：和倉温泉の再活性化に向けて、「観光の盛り上がり」と「地域の再生」を実現するため、若者である自分たちが住民と住民の間に入り、人と人をつなぐ架け橋になる。

地域に暮らす社会全体に対して：私たちが和倉温泉で見聞きしたことを、自分たちの発信を通して社会（日本・世界）全体に広げ、一人ひとりの当事者意識を引き出して、それぞれの防災意識を向上させたり、新たに現地に関わろうとするボランティアを巻き込んだりする。

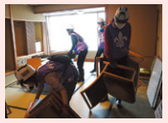
ビジョン達成に向けた「活動の軸」

- 活動の軸①：被災“地”の支援を通して、被災者を支援すること。
- 活動の軸②：現地の声に寄り添い、現地の方々と共に復旧・復興に取り組んでいくこと。
- 活動の軸③：立教チームとして、活動者が次の活動者へバトンを引き継ぐことで、継続的な支援を実現すること。

第1弾 2024.7.1（月）～3（水）［2泊3日］

テーマ「プロジェクトのゴールを探る」

第１弾では、今後の展開を見据えて「現地が求めていること（学生ボランティアにできること・学生ボランティアだからできること）は何か」「本プロジェクトのゴールとは何か」を探ることを意識し、活動を行った。



ボラセン
公式note

■主な活動・ボランティア受け入れ先

（1日目）
・「和倉温泉観光協会・和倉温泉旅館協同組合」（被害状況のヒアリング）
・旅館「加賀屋姉妹館 あえの風」（事前オリエンテーション）
（2日目）
・旅館「加賀屋姉妹館 あえの風」（客室備品の運び出し作業）

学生の声

第１弾として、まずは立教大学の活動を知ってもらうことができたと思う。 でも、まだお客様であり、 本音を話してもらえる関係性ではなかったように感じた。 これから通い続けることで、 ただの一回きりではなく、 本気で向き合いに来ているということを感じてもらい、 おこがましいかもしれないが、 和倉温泉の方々と共に和倉温泉の復興を進めていけたらいいなと思う。（社会学部 社会学科 3年）

活動を通して感じた“ボランティアニーズ”

地震による被害は多様であるが、 どうしても「半壊」や「全壊」などの評価で優先度の順位付けをされてしまう部分がある。 実際に、 行政や法律による評価をもとにした支援から漏れてしまう人や地域が生まれているが、 そこに寄り添えるのがボランティアなのではないか。
今回の活動を通して 「現地の方々の本音を聴くことの難しさ」も知った。 しかし、 自分たちが現地の住民ではない「よそ者」だからこそ話しやすい内容や場面も存在するのではないか。
今後の活動においては、 このような「よそ者」という立場を活かして、 現地の方々との信頼関係を築くことが重要だと感じた。

参加者の声

[共に創り上げた“私たち”のVISION]

第２弾 参加

「何かのボランティアに挑戦してみようかな」 きっかけは単純で、 何となくの応募からはじまりました。 現地についてからは、 お寺の中庭整備や備品移動。 第２弾で予定されていた５日間、 プログラム通りに作業をするものだと思っていました。 しかし活動の中で、「復興支援」という大きすぎてとらえようのない目標に、 自分たちの無力さを感じることがありました。 もっと明確で、 意識しやすい「私たちだけ」の目標がほしい。 そう思い、 勇気を出してメンバーに相談すると、 みんな賛同してくれました。 現地で第２弾の仲間と一緒に創り上げた“私たち”の目標が、 立教チームの「VISION」として位置づけられています。
この活動を通じて、 私の大学生活は180度変わりました。 想いを馳せる人が、 和倉にいること。 人生の宝物ができました。 私らしい、 私にしかできないボランティアの在り方を、 みつけられたような気がしています。 一度、 自分が持っている「ボランティア像」を手放して、 挑戦してみてほしいです。

文学部 史学科 4年
宇野 美咲さん

第2弾 2024.8.16（金）～21（水）［5泊6日］

テーマ「引き出す、受け止める、記録する、広げる」

第２弾では、「現地の方々の声から復興支援としてのボランティアニーズを掘り起こすこと」、「受け入れ先が大幅に減少する中で、本当にボランティアが求められていないのか（＝プロジェクトを終えていいのか）を見極めること」を意識しながら、現地で活動しました。

■主な活動・ボランティア受け入れ先

（2日目）
・「曹洞宗 青林寺」（中庭や山道の整備、本堂の清掃など）
（3日目）
・「真宗大谷派 信行寺」（本堂の清掃、敷地内外の草刈り・整備など）
（4日目）
・旅館「多田屋」
（館内の清掃・備品運び出し、商品の梱包、周辺地域の清掃など）
・旅館「寿苑」（備品の移動作業）
・「和倉温泉観光協会・和倉温泉旅館協同組合」（備品運び出し作業）
（5日目）
・「わくたまくんパーク」（園内及びわくたまくんオブジェの清掃作業）
・「少比古那（スクナヒコナ）神社」（草刈りなど）
・旅館「のと楽」（周辺の海岸清掃作業）
・「和倉温泉観光協会・和倉温泉旅館協同組合」（備品運び出し作業）

ボラセン
公式note

立教大学オフィシャルサイト
「CLOSE UP RIKKYO」

学生の声

個人目標を振り返ってみると、 今回の活動を通じて根底から考えが変わったような気がするし、 またそれが大きな収穫になった。 6月に一般ボランティアとして奥能登に入った際は、 いらなくなった家財などを被災した家から搬出した。 その経験から、 災害ボランティアはそうした直接的活動のことだと思っており、 和倉に着く前は今回の活動が果たして災害ボランティアと言えるのか疑問に思っていた。
しかし、 青林寺や多田屋などでの活動を通じて、 災害前からあったニーズが災害によって深刻になり可視化されたこと、 身近な活動にこそ現地のニーズが隠れているということがわかり、 ボランティアの役割というものが自分の中でより鮮明になった。（観光学部 交流文化学科 4年）

今回のプロジェクトに参加する前、 そして1、 2日目の私は受け身だった。 ボラセンが組んでくれたボランティア活動をただこなせればいいと思っていた。 しかしながら、 先輩メンバーの方々は積極的に自分事としてこのプロジェクトに臨んでいることを知り、 皆との多くのミーティングを通して、 このプロジェクトに対して主体的になることができた。 当初はプログラム通りに取り組んでいたが、 自分が目標としているところは何なのかを自分の頭でよくよく考えて、 そこに必要なアクションとして、 現地の人々に防災についてのお話を聞きにいくことができた。
（コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科 1年）

※学年は当時のもの

第3弾 2025.2.17（月）～20（木）［3泊4日］

テーマ「架け橋になる」

第３弾では、立教チームが目指すかかわり（VISION）の実現に向けて、地域住民同士をつなぐ架け橋になることを意識しながら、オリジナルイベント『わくらDiary』を開催。「和倉で見つけた“あなただけの”宝物」をテーマに、参加者一人ひとりの語りを引き出し、他の住民の方々と共有した。

■主な活動・ボランティア受け入れ先

（1日目）・「曹洞宗 青林寺」（本堂前の雪かき、観音さまの前掛けづくり）
（2日目）・旅館「多田屋」
（不要食器等の整理・値付け、トートバッグ・缶バッジ制作）
・「和倉地域」（オリジナルイベントのポスター配り）
・「和倉温泉 総湯」（震災被害及び復興状況に関するヒアリング）
（3日目）・「和倉温泉 総湯」（オリジナルイベント『わくらDiary』の開催）
（4日目）・「和倉温泉観光協会・和倉温泉旅館協同組合」
（震災被害及び復興状況に関するヒアリング）

学生の声

人と関わることで心の面での支援にもつながるのだと実感した。
和倉の方々と直接話をする中で、 彼らがこの土地をどれほど愛し、どのような未来を思い描いているのかを知ることができた。
それぞれの言葉の中に、 震災を乗り越え、 前に進もうとする強い意志を感じた瞬間でもあった。
（経済学部 会計ファイナンス学科 2年）

※学年は当時のもの